様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５２０４９３

研究課題名（和文）イテリメン語の語彙データベース構築と比較研究ー系統・接触関係の解明に向けてー

研究課題名（英文）Itelmen Lexicon Database Construction and its Comparative Study: Researching Genealogical Relationships and Language Contact

研究代表者
小野　智香子（Chikako, Ono）

千葉大学・人文社会科学研究科・特任研究員

研究者番号：５０４６６７２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では過去に記録された語彙データおよびすでに出版された言語資料から語彙データを整理し、さらにロシア連邦カムチャツカ地方におけるフィールド調査を実施して、新たにイテリメン語北部方言の語彙を記録・収集してイテリメン語南北方言語彙データベースを構築し、英語・ロシア語・日本語・イテリメン語で検索可能なシステムとしてインターネットで公開した。また構築したデータベースに基づきイテリメン語南北方言語彙の比較研究（小野 2014）を行った結果、イテリメン語北部方言と南部方言で同起源の語が全体の75%を占め、残りの25%は北部方言に固有の語が8割、南部方言に固有の語が9割を占めることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, an Itelmen Lexicon Database was constructed with old linguistic material and new recordings from fieldwork undertaken in Kamchatka. The database is open to the public on a website and users can search the Itelmen lexicon in English, Russian, Japanese, and Itelmen. The database can also be searched in the Latin or Cyrillic alphabet. The author was also engaged in a comparative study of the dialects of Western Itelmen (Ono 2014). As a result, it became clear that 74% of the lexicon's cognates originate in the northern and southern dialects (=NI-SI), while the remaining 26 % of the lexicon comprises non-cognates (=NI/SI). The non-cognate lexicon of the northern dialect comprises 80% of the NI/SI lexicon, while the non-cognate lexicon of the southern dialect accounts for 90% of the NI/SI lexicon. In sum, the Itelmen lexicon has a high ratio of its proper cognates.

研究分野：言語学

キーワード：イテリメン語　チュクチ・カムチャツカ諸語　語彙データベース　系統関係　言語接触　方言比較研究　ロシア

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内外の研究動向

イテリメン語は，ロシア・カムチャツカ半島で話されている，消滅の危機に瀕した言語である。国外におけるイテリメン語の研究は，旧ソ連邦が中心となって 1930 年代から 1970 年代にかけて行われた。イテリメン語の語彙に関するデータは，国外ではアメリカの Worth (1961)による語彙集，ロシアの Volodin and Khalojmova (1989)による学校教材用の辞書があるが，いずれもイテリメン語南部方言に基づいたものである。北部方言の資料は，Moll (1960)に収録されている少量の語彙にとどまっている。最近では，チュクチ・カムチャツカ諸語の比較語彙集(Fortescue 2005)があるが，語彙の見出し項目のみで，例文や詳細な意味記述は含まれていない。これまで，イテリメン語の本格的な辞書は編纂されていないのが現状である。

ソ連崩壊以降，ロシア国内ではイテリメン語の調査研究は行われなくなり，この分野では現在日本の研究が世界をリードしていると言ってよい。申請者は 1997 年からロシア・カムチャツカにおけるフィールド調査を開始した。小野（1998）では，まず文献資料に基づいて語彙を分類し，魚や海獣，植物利用など特定の分野の語彙の多様さがイテリメン語の生活文化の特徴を反映していることを指摘し，派生関係が明らかになっていない語彙や，周辺言語からの語彙の借用，逆にイテリメン語から周辺言語への借用，両者の意味範囲の違いといった課題を確認した。

2000 年から 2002 年にかけて，『アジア・アフリカ言語調査表 下』（東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所, 1979）の 2000 項目に基づく語彙調査を実施し，Kurebito et al. (2001) において，本研究申請者がイテリメン語北部方言の語彙，谷津光宏氏がイテリメン語南部方言の語彙それぞれ前半の 1000 項目を調査・報告した。その後，申請者は後半の 1000 項目の調査結果をまとめ，小野(2003)「イテリメン語北部方言語彙調査報告（追補）」として発表した。また，『アジア・アフリカ言語調査表 下』の語彙項目にはない，カムチャツカの生態系や生活習慣・文化的語彙を網羅的に収集し，その成果として『イテリメン語北部方言語彙・会話例文集』（小野 2003）を発表した。

(2) これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯について

チュクチ・カムチャツカ諸語において，イテリメン語が同系統であるかどうかは，これまでも専門家の間で意見が分かれている。というのも，イテリメン語は他のチュクチ・カムチャツカ諸語とは大きく異なる特徴を持っているからだ。例えば，7 子音連続まで許容される音節構造，能格言語ではなく，統語構造が大きく異なること，動詞による名詞抱合がみられないこと，などが挙げられる。また，イテリメン語の語彙の分布について申請者が調査したところ（Ono 2010），他のチュクチ・カムチャツカ諸語の語彙の分布とは大きく異なっていることがわかった。

イテリメン語北部方言と南部方言でも形態の異なる語彙があるが，それらは各方言に固有の語彙である場合と，隣接する民族との接触による借用である場合の，両方の可能性が考えられる。そこで，イテリメン語とその他のチュクチ・カムチャツカ諸語の系統・接触関係を解明するためには，本格的な語彙調査を実施して，イテリメン語の両方言に固有の語彙，隣接するコリャーク語からの借用語，ロシア語からの借用語がどの程度存在するかを明らかにする必要がある，という着想に至った。

２．研究の目的

(1) イテリメン語の語彙データベースの構築と公開

本研究では，Kurebito et al. (2001) および小野 (2003) による『アジア・アフリカ言語調査表 下』の No.0001～No.2000 の語彙項目や，小野(2003) で報告した，カムチャツカの生態系や生活習慣を反映した文化的語彙，さらにこれまでに未発表の語彙および古い文献資料の語彙を整理し，データベースに反映させる。またフィールド調査を実施してできるだけ多くの語彙を新たに記録し，最終的には 3000 語程度の収集と整理･分析をめざす。

それにより本格的なイテリメン語の語彙データベースを構築し，インターネットで成果を広く一般に公開する。

(2) 構築した語彙データベースに基づく，イテリメン語の方言間比較研究

イテリメン語はかつて東部語・西部語・南部語の３つの「言語」が存在していたが，現在ではこのうちの「西部語」しか残っていない。現存する西部語は，カムチャツカ半島北西部で話されており，北部方言と南部方言に分類できる。

本申請課題では，構築した語彙データベースを利用して，イテリメン語北部方言と南部方言の比較研究を実施する。Ono (2010) では『アジア・アフリカ言語調査表 下』による 1000 項目（No.0001～No.1000）の語彙の比較を予備調査として行った。本研究では語彙を 3000 語程度まで増やし，より規模の大きなデータベースに基づいて研究を行うことが可能になる。これにより，イテリメン語の北部方言と南部方言における規則的な音対応や，語彙の分布がどの程度重なり，どの程度異なるのか，またコリャーク語・チュクチ語等と共通する語彙がどの程度存在するのかを明らかにする。

３．研究の方法

(1) 過去に収集した語彙データの整理と分析

古いワープロソフト，表計算ソフトなど，フォント・文字コードやフォーマットの異なる語彙データを Unicode でエンコーディングし，データベースソフトウェアを使用して一元化する。

(2) フィールド調査による語彙データの収集

カムチャツカ地方チギリ村にて，イテリメン語のフィールド調査を実施し，語彙，例文，テキスト，それらの音声を記録・収集する。

(3) フィールド調査によって新たに得られた語彙データの整理と分析

音声・映像データの加工・編集ならびに聞き起こしを行ってテキストを電子データ化し，新たな語彙とその文法情報を分析する。

(4) 先行研究や文献における語彙データの整理と分析

先行研究や文献上の語彙データ，およびロシア科学アカデミーに所蔵されている 1960-70 年代に記録されたイテリメン語の手書きカードから語彙情報を収集し，電子化する。

(5) 語彙データベースの構築

収集された語彙データを整理・分析してイテリメン語南北方言語彙データベースを構築する。音声が得られた語彙には音声データを追加して，インターネットで公開する。

(6) 語彙データベースを用いて，イテリメン語南北方言の比較研究を行う

４．研究成果

(1) イテリメン語南北方言語彙データベースの構築と公開

本研究では過去に記録された語彙データおよびすでに出版された言語資料から語彙データを整理し，さらにロシア連邦カムチャツカ地方におけるフィールド調査を実施して，新たにイテリメン語北部方言の語彙を記録・収集してイテリメン語南北方言語彙データベースを構築，英語・ロシア語・日本語・イテリメン語で検索可能なシステムとしてインターネットで公開した。

(2) イテリメン語南北方言語彙の比較研究

構築したデータベースに基づきイテリメン語南北方言語彙の比較研究（小野 2014)を行った結果，次のことが明らかになった。

①イテリメン語南北方言全体の語彙の構成

イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源の語彙（NI-SI）は全体の約 3/4 を占め，北部方言と南部方言で形態的に異なる語彙（NI/SI）は約 1/4 である。

②北部方言と南部方言で同起源の語彙 (NI-SI) の内訳

イテリメン語北部方言と南部方言で同一または同起源の語彙（NI-SI）のうち，イテリメン語とチュクチ・コリャーク諸語で形態的差異の大きい語彙（NI-SI/ChKA)は 85%を占める。また 15%がチュクチ・コリャーク諸語との対応を示している(NI-SI-ChKA)。

③北部方言と南部方言で異なる語彙（NI/SI）の内訳

北部方言と南部方言で異なる語彙（NI/SI）

のうち，75%がチュクチ・コリャーク諸語の語彙との形態的差異が大きい語（NI/SI/ChKA）である。北部方言とチュクチ・コリャーク諸語に対応が見られる語彙（NI-ChKA/SI）は 2 割弱，南部方言とチュクチ・コリャーク諸語に対応が見られる語彙(NI/SI-ChKA）は 1 割に満たない。従って，チュクチ・コリャーク諸語との共通要素は南部方言より北部方言の方が多いことが示された。また，北部方言，南部方言，チュクチ・コリャーク諸語でそれぞれ異なる語彙が 4 分の 3 もあるということから，北部方言と南部方言の語彙の違いがチュクチ・コリャーク諸語との共通性（同起源あるいは接触による影響）のみならず，方言分岐により独自の語彙体系を持つに至ったと考えられる。

④北部方言と南部方言で異なる語彙（NI/SI）のうち，北部方言（NI）の内訳

⑤北部方言と南部方言で異なる語彙（NI/SI）のうち，南部方言（SI）の内訳

イテリメン語北部方言と南部方言で異なる語彙（④⑤）について，北部方言においては北部方言に固有の語彙（NI/ChKA）が約８割で，残りの２割程度をチュクチ・コリャーク諸語と形態的対応を示す語彙が占めている。対する南部方言では，南部方言に固有の語彙(SI/ChKA)は約９割，チュクチ・コリャーク諸語と形態的対応を示す語彙の占める割合は約１割という結果になった。

全体としてイテリメン語に固有の語彙が占める割合はかなり高いと言わざるを得ない。北部方言と南部方言で異なる語彙は，それぞれの方言に固有の語彙と，隣接する民族との接触による借用の両方が考えられる。また，北部方言の方がチュクチ・コリャーク諸語との共通点が多いのは，地理的な近さゆえの民族間交流が南部方言話者よりも活発であったことの証である。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① Chikako Ono, Labile verbs and their argument structure alternations in Itelmen. *Acta Linguistica Petropolitana*: 査読無，13, (forthcoming)

②小野智香子「イテリメン語の否定の構造」『北方言語研究』査読有，5: 2015, 39-53. http://hdl.handle.net/2115/58327

③小野智香子「イテリメン語西部語北部方言とチュクチ・コリャーク諸語—語彙から見た接触・系統関係の再検討—」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』査読無，16: 2014, 217-230. http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00117990

④小野智香子「イテリメン語の形動詞に関する考察」『北方言語研究』査読有，3: 2013, 137-154. http://hdl.handle.net/2115/52606

⑤小野智香子，吉岡乾「FLEx によるイテリメン語語彙データベースの構築と辞書の出力」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』査読無，15: 2013, 79-99. http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00117437

⑥小野智香子「旧ソ連時代にロシアで記録されたイテリメン語資料について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』査読無，14: 2012, 21-31. http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00116598

⑦小野智香子「イテリメン語テキスト 6」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』査読無，13: 2011, 155-166. http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00080914

〔学会発表〕（計 4 件）

①小野智香子「イテリメン語の否定と法」日本言語学会第 149 回大会，2014 年 11 月 16 日，愛媛大学（愛媛県松山市）

②小野智香子「イテリメン語とイテリメンの人々」言語で巡るシベリアの旅—北方の人々のことばと暮らし，2014 年 7 月 5 日，新潟大学（新潟県新潟市）

③ Tatiana Degai, Chikako Ono, David Koester “Keepers of the Native Hearth

2012 – community efforts to save the endangered Itelmen language in Kamchatka Peninsula, Russia." Conference on Language Documentation and Conservation 3. March 03, 2013. University of Hawaii, USA
④小野智香子「イテリメン語の人称表示と動詞項—斜格補語構文を中心に」第５回動詞項構造研究会，2011 年 10 月 8 日，名古屋大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計１件）
山田仁史，永山ゆかり，藤原潤子編，高橋靖似，小野智香子他『水雪氷のフォークロア—北の人々の伝承世界』勉誠出版，2014, 345(70-101)

〔その他〕
イテリメン語語彙データベース
http://cas-chiba.net/fareast/Itelmen-search.html

６．研究組織
(1)研究代表者
小野 智香子（ONO, Chikako）
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・特任研究員
研究者番号：50466728